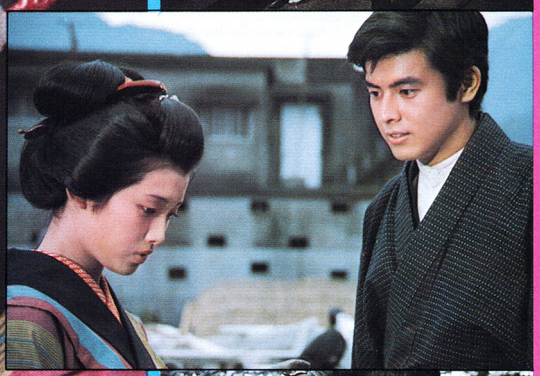
花のような
微笑みと
豊かな髪
青く澄んだ
黒い瞳の少女
それが
踊子だった







山口百恵・映画主演第一回作品

伊豆の踊子

《カラー作品》原作■川端康成/監督■西河克己/東宝・ホリ・プロダクション提携作品/東宝配給

東宝

12月28日公開 千代化劇場

《カラー作品》山口百恵・映画主演第一回作品

伊豆の踊子

《スタッフ》

原作……川端康成
製作……堀威夫
〃……笹井英男
脚本……若杉光夫
監督……西河克己
撮影……萩原憲治
照明……高島正博
録音……木村暎二
美術……佐谷晃能
音楽……高田弘
主題歌「伊豆の踊子」(CBSソニー)
唄・山口百恵

《キャスト》

かおる(踊子)……山口百恵
川島(旧制一高生)……三浦友和
栄吉(かおるの兄)……中山仁
千代子(その女房)……佐藤友美
のぶ(千代子の母)……一の宮あつ子
百合子(雇いの女)……四方正美
おきみ(酌婦)……石川さゆり
鳥屋……江戸家猫八
紙屋……三遊亭小円遊
飴売りの男……青空はるお
福田屋の板前……鈴木ヒロミツ
見知らぬ高等学校生……新保克芳
ナレーター……宇野重吉



●かいせつ

昭和48年5月「としごろ」(CBSソニー)でデビューし、たてつづけに大ヒットを飛ばして日本中のアイドルになった山口百恵が、今まで五度び映画化され、大女優への足がかりとなると言われる川端康成の名作に取り組んだ、映画主演第一回作品です。

相手役、川島には一般公募一〇、〇〇〇通より一位に選ばれた三浦友和、二位の東大現役の新保克芳君は、旧制高等学校生役で特別出演、話題をまいている。

監督は「若い人」「青い山脈」「絶唱」の西河克己が、吉永小百合の主演で製作した「伊豆の踊子」につづいて、この作品二度目の演出にあたる。脚本は若杉光夫、製作は堀威夫、笹井英男。

主題歌「伊豆の踊子」唄・山口百恵(CBSソニー)
作詩・千家和也　作曲・都倉俊一
東宝・ホリ・プロ提携作品／東宝株式会社配給

●ものがたり

大正の末、天城に向う山道を行く一高生の川島は、旅芸人の一行に出会った。太鼓を背負った古風な髪型のよく似合う美しい少女を一行の中に見つけて、川島は疲れた心が洗われる思いだった。豊かな黒髪の踊子は、兄の栄吉とその妻、千代子、母親ののぶ、それに雇い娘の百合子の五人で、三味線や太鼓、そして唄や踊りで温泉場の料理屋や旅館の客を相手につましい生計を立てていた。

かおるという名のその踊子は、下田まで川島と一緒に旅が出来ると知って喜んだ。湯ヶ野について踊子と五目並べに興じたりしていたある日、栄吉と風呂に入っていた川島は、向いの共同風呂に入っていた踊子が裸のまま立ち上り、こちらに手を振るのを見て、その無邪気な子供らしさに思わず微笑みを感じた。

そんなある日、山蔭の古小屋に小犬を追いかけて行った踊子は、小屋の中で粗末な夜具にくるまって寝ている少女を見つけた。それは、踊子が会うことを楽しみにしていた幼馴じみのおきみであった。酌婦をしていたおきみは客を取らされ、病気になった今は、厄病神あつかいされて古小屋に追い払われていたのであった。浮世の汚れを知らぬ踊子には、余りにも衝激的な光景であった。

おきみの死を知らないまま湯ヶ野を離れた踊子一行は、川島と共に下田へ向った。踊子は道中ずっと生れ故郷の甲府のことや、いま住んでいる大島のことを川島に話して聞かせた。踊子のはずむような声が、川島の胸に心地よく響いた。

下田に着いて明日は川島が東京へ帰るという日、川島との活動見物を楽しみにしていた踊子は、二人の仲を案じたのぶに止められて涙を呑んだ。

翌朝、川島が栄吉に送られて乗船場に近づくと、海辺に踊子の姿があった。つかの間の別れをつげ、川島の乗ったはしけが遠ざかり、大きく曲って岬のかげにかくれた。踊子は栄吉が止めるのもきかずに走った。岬の突端へ出ると、巡航船に乗り移ろうとする川島の姿が見えた。思いきり手を振る踊子。彼女に気付いた川島も、甲板の上から狂ったように手を振る。船が動き出し、次第に小さくなっていくかおるの姿。あふれる涙をめぐいもせず手を振りつづけている川島の手には、ついさっき踊子からもらった櫛が握られていた。

岬はもう——見えない。

★山口百恵のプロフィル

本名　山口百恵
生年月日　昭和34年1月17日
年令　15才
出身地　東京生れ　横須賀育ち
身長　160cm
体重　48kg
B83cm　W59cm　H86cm
学歴　横須賀市不入斗中学二年終了後、品川中学に転向、現在日の出女子学園1年在学中。
芸歴　昭和47年12月NTV「スター誕生」にてホリ・プロにスカウトされる。
発表レコード　「としごろ」「青い果実」「禁じられた遊び」「春風のいたずら」「ひと夏の経験」「ちっぽけな感傷」(74年10月現在)